慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・パトンの訪日日記(1947年) (下)
Sub Title	John Paton's diary in Japan (1947) (II)
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1994
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.86, No.4 (1994. 1) ,p.413(81)- 431(99)
JaLC DOI	10.14991/001.19940101-0081
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19940101-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」86巻4号（1994年1月）

資　料

ジョン・パトンの訪日日記（1947年）

——（下）——

松　村　高　夫

10月19日

本当にすばらしい，くつろいだ一日。このことを私はジョン・フィギス大佐に感謝しなければならない。彼はドライブに連れだし，横浜を通って，富士山麓の小さな丘にある〔箱根〕宮の下の富士屋ホテルに連れていった。横浜は戦時の破壊からの再建途上にあり，現在は見渡す限りの空地で，そこここに木造の堀立小屋が小さな集団や列をなしている。横浜をすぎると日本的な村落をいくつも通ったが，いずれも興味深かった。東京に到着して以来はじめて，私の記憶する沢山の絵画から想像していたような日本の風景があらわれた。我々が山に近づくにつれ，景色はますます美しくなり，スコットランドの高地地方のあるところと全体によく似ているのが，また印象的だった。丘の輪郭と見晴らしのようすが似ていると思う。2時間のドライブの末，我々はこのすばらしい環境にあるホテルに着いた。かつてはそれは純粋に日本人の休暇用ホテルだったが，いまでは米軍に「将校」用として接収されている。そこにはすべての位階の将校とその妻や子供達で一杯である。イギリス人と同様にアメリカ人も，彼等がいるところはどこでも自国の食糧品を好んで食べることがわかって，私は関心をもったがまた失望もした。我々はじっさいコーンビーフ・ハッシュを食べたのである！（フィギスは後で私に，アメリカ人は日本の食糧が欠乏しているのでそれを食べることは禁じられており，完全に合衆国から送られる食糧で生活している。しかしながら，彼はアメリカ人は彼等自身の食糧を食べるのがとにかく好きなのだということを認めた。）ローズとプレスコットは昨夜山のもっと高いところにある日本式ホテルで過ごして，ここで我々と合流した。（これは禁じられていることだが，今回のように，しばしば大目にみられる。）彼等はローズについて傑作な話をした。ローズは日本独特の風呂に入ったところ，たいへんかわいらしい日本人の女中が背中を流し身体をふこうといいだしたという。その女中は彼がいやがり，ひどく極めてはっきりと当惑しているのを意に介さなかった。明らかに，ホテルの

従業員たちはローズが自分の体をくるもうとする仕草がおかしくてしかたがないようだった。しかし，ローズはその少女が彼の悪い足の靴下をひいたときの彼女の優しい手について語った。（彼は不治の傷のある片方の脚に下肢矯正器をつけていた。）風呂に入った後，彼とプレスコットは，旅館の豪華な着物を着てしまい，素敵な日本料理の席についた。（私はこの失態をした彼等が羨ましかった。）午後，我々は美しい庭園を数時間歩き廻り，隣の村を探索した。店頭の買おうと思ったものの円表示の価格は全く驚くべきものだった。私は（孫の）キースに手品箱を65円（イギリスでは約30シリング）で買った。1ポンド40円と，円は馬鹿々々しい程高く買われている。我々が出発するまで富士山はもやに覆われて見えずにいたが，家に向う途中，ほんの数秒間だったが，たまたま自動車のうしろの窓越しに，残光に輝らされて雪をかぶった円錐が輝くばかりに鮮明で壮大な光景をみた。何と幸運な瞬間よ！　大使館に戻り，くつろいだ非公式の夕食をとるが，そこで不運なことが起った。プレスコットは，酔うには極めて少量を要するだけなのだが，節度のない飲みすけである。夕食のときにかれはカクテルを沢山飲んで酔いはじめ，ガスコインと私に，我々の人生についての話を互いにするよう求めはじめた。彼は夕食の間，数回これを試みたが，私は彼に思いとどませることができた。だが，ポートワインを飲むまでにかれは手に負えなくなっていた。閣下〔ガスコイン〕が驚いたことに，かれは我々に，彼の兄がアルコール中毒のために家に閉じ込められ，最後には飲酒で死んだこと，また，彼の姉は精神病施設に出たり入ったりしていたこと，さらにもっと気味の悪いプレスコットの家族の歴史を話した。閣下はおそろしく困惑しているようであり，彼の妻にできるだけ早く立ち上がるよう合図を送った。閣下がそれについて何か言及したばあいのことを考えて，プレスコットを寝かせてからローズやティーリングやラングに起ったことを話すのが最良であると私は考えた。ローズとラングはすでにその家族の歴史を知っており，ティーリングは，もちろんプレスコットの飲酒癖を知っていた。私が思うに，真実はプレスコットが根本的に不安定であり，毒薬のようなアルコール（かれにはアルコールは毒薬なのだ）を止めるべきだということである。

10月20日

連合国軍最高司令部で，なお他の「報告」。12時15分，我々はコモンウェルス・ハウスで昼食をとる。十分な食事とたいへんよい会話。午後2時，連合国軍最高司令部に戻り，サムズ大佐と公衆衛生について興味ある価値ある討議。彼は連合国軍最高司令部のこの部門の主任職員である。彼はこの国の公衆衛生制度がかなり良好だったり，貧弱だったり，極めて劣悪だったりする，ひどくごたまぜの状態であることを我々に雄弁に語った。これは，私は満足しているのだが，合衆国の圧力，即ちその組織の重要な構成要素である横柄な残酷さが，善政を施すだろう一分野である。午後5時30分，インド代表のサー・ラマ・ランによるカクテル・パーティーのために帝国ホ

テルへ。他の全てのことと同様に――同じ断片的な話，同じ人々，同じ超満員の部屋，全部ジンを基本にする同じ飲み物――，同じいまいましい退屈さ！　午後8時，ガードナー元帥とその夫人とのディナーの客となる。これは真に文明化された場であり，素敵な食事とワインがある。他にわずか数名の気心のしれた人たちだけであり，よい会話がなされた。ヨーロッパの新設備は必要なもの以外最小限にした美しい日本の家だったから，結果は，快適かつ適切だった。真に刺激的な楽しい夜。

10月21日

北方の島，北海道に午前8時に飛び立つために羽田空港へ早朝出発。我々はガードナー元帥の個人所有の飛行機で快晴のなかを飛んだ。午前11時頃，北海道南岸を横切って間もなく，我々は活火山のたいへん近くを通過した。その火山は，山の側面に溶岩が流れているようにみえ，巨大な円錐状の水柱を頂上にいだいていた。空からみたこの島は，荒々しい光景の山々と深い渓谷が入りくんでいる，未開の広涼たる土地のようである。至るところ山腹は真紅なもみじで燃えていた。それはすばらしい光景だった。11時30分，我々は主要都市札幌に向う空港に降りたち，そこでいつもの歓迎委員会の出迎えをうけたが，今回は全く軍人の歓迎だった。空港はわびしい光景の所であり，でこぼこにみえる広地と余り変らないものだった。我々は昼食のためにグランド・ホテルに連れていかれたが，はげたコンクリートの外壁はみすぼらしく，内側は暗い装飾できたならしかった。我々はこの島を訪問する労をとった最初の議員代表であり，当然我々の訪問は強い印象を与えた。訪問する上院・下院議員たちは，いつもこの島を通りすぎた。合衆国の職員たちは私に彼等の代表団は常におもしろ半分の遊覧にだけ関心があり，我々は彼等がかつてお目にかかった実際に仕事をする最初の議員団だと語った。旅行者がいないので，醜い不快なホテルになるのかもしれないが，それは人口約25万人の醜い都市である。主要な通りには大きなコンクリートブロックの事務所やアパートがあり，全くアメリカ的である。だが裏通りは例によってみすぼらしい小屋が一杯ある。もっとも南〔の本土〕より堅固に建てられているが。ここの冬の天候はシベリアのように厳しいことがある。午後1時30分，我々への一種の「説明」（いつもの「報告」の変種）が道庁であった。日本人の職員が多数の地図や表を示して，実に首尾よく行なったが，彼等は明らかにひどく神経過敏になっていた。これは通訳にも影響を及ぼし，かれの英語は聞きとりにくかった。名前は浦部さんといい，我々の滞在中，公式の通訳として我々に付いていた。日本人としては彼は大柄な人であるが，北海道の人々は一般的に南の島〔本土〕の人間よりずっと大きいときいている。イングランドを離れて以来私が慣れてきた気候に比べると，ここはこの緯度の割にずっと寒い。午後4時，我々は農事研究所と展示場を訪ねた。この島にはよい牧草があり，沢山のよい食肉用の牛がいる。6時30分，コナー大佐の家のパーティーに案内されるが，そこには合衆国の職員とその妻たちが多数彼に招待されていた。全

部カンヅメのおいしいアメリカの食事をし，殆んどがひっきりなしに運ばれるジンだったが，多量の酒を飲み，我々はくつろぎ，よき友情と歓びにみちた素敵な夜となった。楽しかった。

10月22日

スウィング元帥の特別列車で美唄（三菱）炭鉱へ早朝出発。管理者の事務所で「報告」を受けてから，炭鉱の坑外の設備を視察した。見かけ倒しの装飾のある建物にはいつものような印象をもったが，この炭鉱は近年大量の石炭を産出している。機械や設備は時代遅れで，極めて悪い状態にあるようにみえる。7千人の労働者で1ヶ月当り約5万2千トン産出しているといわれた。通訳はその数字は正しいと私に断言したけれども，その数字はどこか誤っていると私は確信している。列車のなかで会議に参加する労働組合の役員3人と会う。組合の委員長は高等学校卒であり，実際には炭鉱ではなく，子会社のクロム工場に働いている。彼はたいへん話好きな人で，明らかに組合の実力者だった。3人のなかの2番目の人は知的な顔付きの青年で，小学校の教育しか受けておらず，炭鉱の事務所で働いていた。3人目は全く異なった体格をしており，たった一人すぐに坑夫とわかる人だった。かれは13年間採炭夫として地下で働いていた頑丈な力の持主だった。彼は炭鉱夫の息子で，小学校をでただけである。彼は多く語らなかったが，頑健で実力のある人だという強い印象を与えた。彼等は政治に極めて用心深いが，3人とも社会民主主義者に投票したといった。3人のうち誰も以前は労働組合の仕事を経験したことはなかった。労働組合が活動することは合衆国の行政が望むところであると信じる経営側の圧力の結果として，労働組合が存在するようになった。この3人の専従組合役員は会社の支払給与で維持されており，相当高い地位の事務職の賃金を得ていた。彼等はまず100人ずつの労働者のグループによって組合のこのような職務に指名され，そののち大衆投票によってこれらの職務に選ばれた。組合費は賃金の10％であるが，経営側が控除して組合に払っていた。それは私には重い負担と思われたが，10％というのは正当な数字であると主張された。賃金は平均して基本給が1ヶ月約300円だが，産出額に応じて賞与が加わった。総額は生産性の低い労働者には不利に分配されるとのことであった。（数字の各々の組は他の各組と相反するので，賃金水準を真に理解するのは殆んど不可能であることがわかる！）我々は列車のなかでよい昼食をとり，それから開廷中の地方土地改革委員会をみるために，美唄の市役所を訪問した。議事は理解できなかったが，委員会にきた農民たちのようすや行動を観察するのは興味あることだった。彼等は善良な正直なタイプの人のようであり，日本の標準からいえば良い衣服を着ており，私がみることができたかぎりでは，我々が委員会に出席していることが決して彼等を威圧してはいなかった。我々は帰路の列車のなかで楽しい歌を歌った。案内役の合衆国の職員たちも，ウィスキーとジンを数本飲んだことも手伝って，一緒に歌った。我々の通訳の大柄の浦部さんは恐ろしく悲し

げな民謡を歌ったのだが，彼はそれは古い日本のバラッドだという。夕方，我々はクロウフォード・キャンプの職員クラブでディナーを食べ，ダンスを踊った。ジョセフ・スウィングとその夫人を先頭に沢山の職員とその妻たちがでてきた。たいへん魅力的な若い妻ケギー夫人は，私に「ボウリング」の技を教えようとする労をとった。それは我々の古くからあるイングランドのスキトル（九柱戯）なのだが，アメリカ人が他の遊びでもそうするように，スキトルよりもその遊びは激しくなされる。二人の元帥――スウィングとガードナー――は，ボウリングの技術の優れた代表者であることを示した。ホテルに戻るとプラウド大佐（案内役の一人）が，酔っているときはいつでもそうなのだが，たいへんセンチメンタルで敬虔になっているのに気づいた。北海道の日本人知事は，我々一人一人にたいへん美しく良質な絹でできた旗をおみやげ（この地方では「プレゼント」という）にくれたが，しかし開いてみるとそれは星条旗になった。

10月23日

早朝に出発し，展示酪農農場を訪問するため，滝のような雨のなかの悪路をいく。これが本当の田舎に我々が接した最初であり，ドシャ降りの雨の中でさえとても美しかった。木々は秋の葉が鮮やかであり，殆んどが紅いもみじであった。この北の島は本土より厳しい天候で，冬にはひどい霜と大雪が降り，ふつうはもっと雨が降る。ここは日本で唯一の広大な牧場と良質の酪農用と食肉用の牛のいる地域である。

我々はある古いたいへん興味深い建物の農家に丁重に迎え入れられた。玄関で靴をぬいでスリッパをはくと「背の高い息子」と一緒の旧式な日本人の母親に出会った。その息子は農民であり，彼女がたいへん誇りにしているのが明白だった。姓は町村といい，農場は江別といった。その家族の父親は参議院議員なのでほとんど東京にいる。雪の上に何頭かのすばらしい牛がいるが，ウィスコンシンの有名なカーネーション農場からの血統書付きの家畜だった。その雄牛一頭は2万5000ドルであった。父親は東京大学で農学博士号を取得し，その後2年間ウィスコンシンにいた。その息子も東京大学の農学部を卒業し，3年間デンマークにいたが，しかし，明らかにわざわざイングランドを訪れはしなかったのである！　これらすべてが日本の伝統からの全く例外的な逸脱を意味している。牛乳は見事な設備をもった酪農場でバターとチーズになり，じっさい牛乳は一滴も飲まれないのである。ウィーン風に濃い新鮮なクリームでたっぷり覆った良質のコーヒーがここでだされたのは，たいへんよろこばしかった！　コーヒーと一緒にたいへんおいしいホット・ケーキがだされた。その老婦人は全く伝統的な日本の正式のマナーを守った我々をもてなし，息子もまた，外国に（3年）いたにもかかわらず，マナーはたいへん正式でしかも非常に親切で丁重であった。私にはその人たちが快適な家族であることがわかり，このすばらしい旧家を探査するのに時間を費したことをうれしく思った。しかし我々は立ち去らねばなら

ず，降り注ぐ雨の中を森林研究所へいった。そこにはすばらしい実験室と極めて興味ある博物館があった。北海道にはたいへん美しい木の茂った大森林地帯があり，その保存と保護のために大きな努力が払われている。札幌に戻り，早目の夕食をとり，それから東京に戻る旅のため空港にいく。雨は依然として降り注ぎ，給油のため千歳では困難な着陸をせねばならなかった。天気は最後には少し晴れ，眼下に最後の森林の壮厳な眺めを見たが，すべてが紅いもみじで燃えていた。我々は新たな暴風の雲のなかに突っ込み，たいへんガタガタ揺れた不快な旅となった。午後6時10分，東京の無数の灯がみえはじめ，真暗な夜の闇に対して一枚の大きな色の型のようであった。絶景だ！　飛行機は6時15分，完全な着地をした。私はレッドマン夫妻が空港で我々を待っているのをみて，たいへんうれしかった。レッドマンは今や完全に回復し，夫妻は私に感謝の意を表明したが，やや感極まったふうだった。記者会見のために大使館に戻り，ヘッセル・ティルトマンにはじめて会う。彼はひどく不快な人で，私は会わなければよかった。彼の仲間の新聞記者たちも心の底では彼を嫌っているようだということが，私にわかった。もう一度食事，そして早く床に入る。とても疲れた。

10月24日

手紙書きと日記書きの静かな朝を過した。ファーガソン准将の家で彼と昼食をとる。非公式なので楽しい。午後2時，労働組合の指導者たちとの会談のため衆議院へ。殆んど全員が非常に若く全く未経験だが，そのうち何人かからよい素質をもっているという印象を私はもった。私の一般的印象はここ〔日本〕の労働組合運動は幼稚園の段階にあるということである。昔の組合指導者は戦争以前でさえ一掃された。現在の指導者たちは皆完全に経験なしであり，初歩的な知識をもっているだけであるが，日本人は名うての速修者である。労働組合とは何であると考えているか討論から理解するのは困難だったが，これはたぶん通訳の誤りによるのであろう。共産党が干渉し支配するのではなかろうかという恐れが明白にあった。3時30分に私はここを離れ，他の会合にいった。こんどはリード・コリンズが準備した，フェビアン主義者やその他の社会主義者との会合である。最も価値ある討論がなされた。全員が大学の卒業生だった。木村助教授の日本の政治経済情勢の分析が私に特に印象的であり，他の全員もその分析に賛意を示した。彼は日本の民主主義は皮相的なものにすぎず，日本の伝統ないし慣習に根を下ろしていないと述べた。民主主義はたんに事態が変化した結果，到来したにすぎない。このように上から押しつけられたのだから，それは永続する見込みがない。現実的であるためには，それは教育の結果として，下からの緩慢な成長をするべきである。指導者が国民を教育するために国民のところへでていかねばならない。連合国軍最高司令部がその制御をはずしたならば国民は逆行し，彼等の古い方法を再開するだろうということは確実である。〔そうなれば〕混乱と闘争という大きな危険が生じるだろう。そして最終結果は，

多分独裁制度の一つまたは他の一つ――ファシズムか共産主義か――になるだろが，しかし彼自身の信じるところはそのどちらでもなく，両者のある部分を体現しているが，確かに真の民主主義ではない特殊な日本的な制度になるだろうという。天皇については，彼等は皆，天皇の神格の思想が破壊され，復帰はしないが，長期間にわたって国民は極めて多数の古い形態を自動的に遵守しつづけるだろう，という点に同意した。国民が古い慣習から脱皮するのは困難だろうが，天皇が真に神であるとする古い思想が破壊されたことは疑うことができない。経済面では，完全な混乱があった。例えば，石炭会社は毎月7億円の損失をして産出しているが，その赤字は政府の印刷機が常にインフレを助長しているので軽減されている。合衆国への経済的依存は今はそしてしばらくの間は，絶対的であり，それ故，いかなる種類の批判的態度をとることも極めて困難になっている。財閥解体は強制されつつあったが，しかし，現在これらのトラストの財政的専門家に代替するものがいない。――その専門家の領域は合衆国に許容される官僚によって埋められつつあるが，官僚は効果的なノウ・ハウに欠けている――連合国軍最高司令部が去るならば，古い専門家とおそらく財閥の何らかの形態が復活するだろう。午後6時，大使館に戻り職員とカクテルを飲み，たいへん楽しい時を過した。午後8時，私は海軍武官（とても良い人）の大使館敷地内にある家にディナーに招かれる。他の客は英国軍港艦隊を指揮する英国海軍少将と彼の部下の艦長数名だった。その海軍少将の名前は私は知らなかった（今は知りたいとも思わない！）が，私が挨拶してもほとんど応じない無作法な下品な奴だった。他の人たちは彼の手本に従い，皆，身近な勤務中のゴシップを話し，多かれ少なかれ私を無視したが，このことは大いに海軍武官を失望させることになった。それはこのような人たちが示しうるひどい不作法の典型例であった。私はまた，他の将校たちの海軍少将におべっかを使う態度もみた――悪いことばでいえば，彼等は少将にゴマスリをしているのであり，彼の不作法を真似ているのである。私は会釈して急いで退室した。

10月25日

午前9時，我々は東京駐屯隊の英国軍隊――名目的軍隊――訪問にでかけた。（でかける前，朝食時に海軍武官から昨夜の彼の上司が示した無作法を陳謝する旨の短い手紙を受けとった。彼が無作法だったのではないので，彼が陳謝する理由はないのだが，私は彼に手紙を書き，そのことは忘れると伝えた。）10時30分，我々は英国軍艦サセックスとコウマスを視察するために横浜に向う。我々は海軍大将とその部下たちと昼食をとった。私は種々の人々からなる一行の一人にすぎなかったので，昨夜のような不快なことはなかった。その後，数人の乗組員と話したが，そのなかにノリッジからきた一人がいた。私は午後は東京に戻り，銀座通りで買物をしようとした。不完全かつ非現実的な外国為替相場のために，何か購入することは殆んど不可能だった。最後に私は，感じのよいデザインの漆塗りの小

さな針箱を1つ12.5円で3つ買った。私はその時日本人がソロバンに信頼をよせていることからくる欠点のひとつに気づいた。その店の売り子は皆カウンターの彼女の近くにこの器械をひとつもっているが，私が注文していたカウンターは大量の折りたたまれる途中の粗いモスリンのような布地ですっかりくるまれており，ソロバンは一時見えなくなっていた。その少女とその少女が尋ねた他の少女は，12.5×3の掛け算が全くできなかった。私は彼女のために紙の上でその計算をし，彼女は私の数字を大助かりとばかり信じた。（その後私は，ソロバン使用の本当の専門家が驚くべき効率度まで到達しており，西欧の計算機のいくつかと競争して実際それに勝ったということを聞いた。）大使館に戻り，ワット夫妻とお茶を飲む。――たいへん好感のもてる人たちである。午後8時，ナンバー・ワン（大使館内で使われる隠語で，大使用の中央建物のこと）で正式の晩さん会。完全に正式であり，ローソクと菊の花が多数あり，外交団とその婦人たちは皆，「めかし込んで」いた。私はフランスの大臣，ペシュコフ元帥と興味ある話をしたが，彼は私と同じように背広を着ていてたいへん目立った。彼はマクシム・ゴーリキーの私生児といわれている。

10月26日

1日郊外に連れだされ，フィギス大佐と葉山へ。天皇の夏の公邸に接した，太平洋を見渡せるすばらしい湾にある，一軒の美しい日本風の家である。フィギスの友達の少人数のグループとの安息と平穏のすばらしい日。帰路，我々は鎌倉大仏を訪ずれる。不動の巨像の顔にある深い落ちつきが印象的だった。大使館に戻って，大阪行の夜行に乗る。駅で我々のグループは天皇用特別入口を通って入ったが，我々がきいたところでは，その入口は今はまさに要人のために残されている！重要な実際上の理由があったということが，我々が駅に入ったとき明らかになった。数千人の無宿者が一般の改札口とプラットフォームを，毎夜，宿舎に使っていたのである。至るところ彼等は，家族全員と座ったり横になったりしており，警察官が通行人を通させるために開けておく極めて狭い道があるだけである。肝をつぶしているアメリカ人の一人に，私はこれは戦時のロンドンの地下鉄を見たことのある者にはなじみ深い光景であると説明した。これはまさしく空襲中のロンドンの情景に対応するものだった。ただし，ここでは無宿者がボロにくるまり，また，明らかに栄養不良であるという点を除けば，である。

10月27日

列車で窮屈な休息できない夜を過ごして，大阪に到着した。マリンズ元帥とその部下全員の出迎えをうける。我々は列をなす車に乗って駅を離れ，大阪ホテルに向ったが，前のジープは絶えず絶叫調のサイレンを鳴らしつづけ，ピストルを携行するオートバイに乗った先導者がいた。私は映画のなかで巡査と泥棒を演じているような感じをもった。（これは憎むべき傲慢の一つの形と私は思うが，日本人はそれに憤慨しているようにはみえない。）我々は次にモデル綿工場の見学にでか

けたが，またもサイレンを鳴らし，武装したオートバイに乗った人たちが強制的にすべての日本の車をその道路から離れるよう命じた。――アメリカ人のこの傲慢さは見なければ信じられない！　彼等は敗北者の鼻を汚物にこすりつけるのが良いと思っている。――真珠湾の屈辱が深く浸透しているのである。綿工場は極めて近代的で，ハーヴェイ・ローズの厳格な規準さえ満足させるものだった。その後，いくつかの羊毛工場を訪問したが，工場は私には老朽化し貧弱にみえた。このことは後にハーヴェイ・ローズによって確認された。我々は綿工場本部でたいへんおいしい日本食の昼食をとり，その後，繊維機械工場へいったが，工場は大きく極めて近代的にみえた。多数のオールダム〔ランカシャーの都市〕のプラット〔会社〕からきた古い機械はここでは近代的である。この時，私はたいへん疲れていたのでよろこんでホテルに戻り，静かな快適なカクテル・パーティーにでて，その後マリンズ元帥とその部下と夕食をとった，それから再び特別列車で出発し，呉への徹夜の旅。ベッドで眠れれば，どんなにか良いのに。

10月28日

私は列車のなかでもう一晩ひどい夜を過ごして，早朝眼が醒めた。朝食後，朝陽の下の内海の美しさに目をみはった。呉に着くと，我々はいつもの多数の高い位階の将校たちの出迎えをうけた。彼等はロバートソン元帥の指揮下にあり，元帥はオーストラリア人だが，在日英連邦軍の全軍を指揮している。彼は我々を立派な新しいＹＭＣＡの建物やレクリエーション・センターとして開館したばかりの呉会館に案内した。両方とも立派な建物だった。我々は多くの部隊の人々と会い，交流し話しあったが，〔イングランドの〕イースト・アングリアからきた何人かもいた。将校食堂で昼食。そこでラングがすばらしいスピーチをした。――彼は明日帰国し，私が彼にかわって団のリーダーになるので，彼にとってリーダーとしての最後のスピーチとなる。我々はその後に造船所と工場を訪問した。連続的重爆撃の結果，殆んど完全に荒廃に帰した光景。ここの機械工場はかつては巨大なものであり，最高時には11万３千人の労働者が雇用されていた。多数の工場や機械は，我々の機械工が廃物処理作業をし，消散とか処分とかの印がつけられた。私は１台の巨大な穿孔機械をみたが，それは珍しいことだが，新しい原理で作動しているとのことだった。私はまたデューズベリーで製造された圧搾機や沢山のイギリスの機械もみた。それをどうしようとしているのか質問して，私は誰も知らないのだということに気づいた。――誰もそれを漠然と処分しようという以上に考えているものはいないのである。（私はその機械類が呉を離れることはないという点を疑っている！）　その後江田島のロバートソンの本部へ。さらに視察をし，人々と歓談。我々は将校用食堂でよい非公式の夕食をとったが，座長席の元帥も一緒だった。（ラングは今日午後，機動艇で岩国に向った。予定より一日早かったが，政府側の年長のメンバーとして私が今度は一団を導くことになる。）ロバートソン元帥は無理して上品であろうとし，招待

者として愛想がよくさえあった。――東京での彼の下品さからの喜ばしい変化である。

10月29日

美しい朝の7時45分に江田島を離れ，内海を30ノット以上の速い機動艇で岩国に向う。これはすごくスリルがあった。吹きまくる突風と一面の激しいしぶきがひどい揺れを伴い，これらすべてが重なって高速感を強く与えていた。冷たい透明な朝の空気と至るところに広がる実に美しい景色が大いに活力を与え，私の疲労感は消えうせ，生れ変ったような気持だった。内海はクライド湾をより美しくかつもっと大きくしたものに多少なりとも似ているが，色彩は陽の光が輝いており明るいのではるかに鮮やかである。我々は岩国に40分程して到着した。――この忘れ難い経験は余りにも早く終ってしまった。我々は副司令官バウチャーに会い，すぐに美保行の飛行機に乗った。我々は1万フィートの高さになると，たいへん寒いのに気づいた。広島の上空を飛ぶと，原子爆弾によるひどい荒廃の原型が非常にはっきりとみえた。我々は多数の建物などの残骸は今はほとんどきれいに除かれているときかされた。50分間の飛行の後，我々は日本海にある美保に着いた。視察につぐ視察で，なかには一般的な質問をするための大勢の人の集会もあった。他所と同じように，ここでも日常の小さな不平は多数あるけれども，重大な不満はないようにみえた。人々は家がすぐに持てる機会があるかどうかに主な関心を寄せていた。将校用食堂でのうんざりする昼食。――そこの食事調達将校は軍法会議ものだ！　岩国に戻るため再び飛行機に乗り，再び広島上空を旋回したが，今度は低い高度である。非常に多くの一時的再建はなされてきたとはいいながら，広大な爆撃地域が今でも明瞭に識別されうる。これは地上の高さでその地域を調査しようとするよりも，はるかに効果的にその地域を知る方法だと私は思う。飛行機のなかで私はそのことについて考える時間があり，広島に原爆を落とす決定は今後常に極めて疑わしい決定でありつづけると私は確信する。私が原爆投下を正当化するために呼ばれたのではないのはよかったと思う。岩国に着き，再びさらに視察をするが，視察は人々との非常に大規模な活力ある集会が最後にあった。そこでの不平は主に食糧についてであった。私の一般的印象は，これらの駐留地はとてもよい設備で運営されているということである。私は美保における快適かつよく計画された既婚者用住宅にとくに印象づけられた。その住宅はすべての位階の人々に公平に割り当てられていたが，例外は将校は同じ住宅でもより高い家賃を支払うという特権をもっていることである！　副司令官バウチャーの美しい日本風の家で日本食と楽しい夕べをもつ。バウチャーとは徐々になじみ深くなった。私はロバートソンよりはるかに彼の方が好きである。

10月30日

午前8時20分，南の島，九州訪問のため飛行機に乗る。飛行中は美しい朝だが厳しい寒さ。50分間飛んで，福岡に着陸。我々は早く着きすぎた！　汗をかき，たいへん狼狽した

合衆国の大佐以外には誰も待っていない。大佐は我々の案内役になるはずの人で，ロごもりながら謝ってばかりいた。遠方に我々には公式「歓迎者」を運ぶ車の列がみえ，車のサイレンのつんざく音がきこえた。我々の特別列車が整うまで我々は長い間待つことになるといわれた。このことが私にフィギス大佐と都市(まち)を歩く機会を与えた。我々は静かな厳粛な雰囲気があるので極めて印象深い神社を訪れた。フィギスは日本の礼儀を注意深く守り，常に鋳貨(コイン)を入れるために置かれている容器に何枚かの鋳貨を落とす，非常に聡明な案内人である。(彼のいうことから，彼が自分自身仏教に傾いていないかどうかは，私にはわからない。) 私は店のウィンドウの売物用の美しい着物をみたが，そのようなものをみたのは初めてだった。それを近くでみたが，絹は良いものとは思えなかった。フィギスは私のために値をつけ，1600円だといった。——約40ポンド！　彼は私に値うちのある着物は殆んど売りにだされない，それらは家宝として保存され，代々受け継がれる，といった。工場製造のより安い貧弱な着物は，今でも頻ぱんに入手可能だというわけではない。我々は遂に大牟田行の列車に乗る。大牟田で我々は三井連合に属する会社，三井炭鉱を訪問することになっている。我々がそこに着いたとき，炭鉱は巨大な事業であることがわかったが，地上の機械類はイギリスの基準からみるとたいへん古くガタガタであるようにみえた。しかし，もちろん戦争中は，我々と同様にすべてのことが荒廃したままだった。異常に多数の地下労働者と地上の労働者がいるようだった。地上の労働者は大部分婦人だったようである。垂直坑はなかったが，地下約1500フィートの鉱床まで非常に急な坑道があった。たいていの男は衣服というものは殆どあるいは全く着ておらず，多くがふんどしに帽子，長靴，そして脚絆の他には何も装わずに，帰宅するときに地表にでてくる。短い群がってはえているヒゲがひきたたせている黒い顔からきらめく純白の歯のために，彼等の何人かは印象的な像になっている。地下に降りていくのはたいへん汚れる仕事だし，その上私がイギリスで降りたことがあるもっと貧弱な炭坑と相違がありそうもないので，私は降りないかという誘いを拒否した。我々は坑夫の労働組合の指導者たちと会見した。彼等はたいへん若かったがたいへん印象的な人たちで，鋭く知的だった。一人は「乾燥荷造り人」であり，他の一人は会計士であり，一人だけが採炭夫だった。この人たちは会社の給料ではなく，完全に組合の基金で支払われている。その組合は全国炭鉱労働組合に加盟している。その後，我々はドックを視察したが，それは私がかつてアバディーンで慣れ親しんでいたドックと似ているようにみえた。大牟田というこの町のすべてのものが三井に所属しているか，あるいは財閥解体以前に所属していた。私は財閥が逆戻りしないとは確信できない。晩に我々は三井クラブで三井前男爵（称号は今は法律で廃止されている）主催の夕食会にでる。大勢の会社の職員がいた。その夕べは「カクテル」ではじまったが，不幸にも味はニスのようでひどく悪い調合だった。通常日本人は西欧の慣習をまねるとき，日本人自身

の絶妙な食物や慣習とは驚くほど対照的に，西欧の慣習を台なしにしてしまう。夕食は日本風で，たいへんすばらしく，また酒も全く十分のようだった。三井男爵は形式上，彼のすべての称号と財産を剝奪され，今は公式には彼の以前の従業員のなかの「一人の福祉労働者」である。しかしながら，たいへん注目に値するのは，アメリカ人たちは彼から彼の財産を剝奪したけれども，彼の権威を破壊することは全然できなかった，ということである。その晩，誰ひとりとしてまず最初に男爵の方を心配気に見ずに動いたり喋ったりはしなかった。私はアメリカ人が〔日本を〕離れてから1ヶ月と経たないうちに，三井は所有権を回復し，彼のすべての財産を支配すると賭けてもよい。彼は非常に威厳のある気持のよい招待者で，英語がよくできる。その晩は我々ひとりひとりへの「プレゼント」で終った。それはある地方の陶器（そこも三井）の有田焼のカップ，ソーサー，皿だったが，たいして印象的にはみえなかった。

10月31日

列車は午前3時40分，八幡に向けて出発し，午前8時に着いた。我々は年間250万トン生産可能な巨大な鉄鋼工場の視察を開始した。6万4千人を雇用する収容力があるが，今は2万4千人にすぎない。我々は本部に迎えられ，たいへんおいしくお茶を飲みながら基礎的な短い説明をきく。その工場はもともとは三井が私的に所有していたものであり，その後日本政府に買いとられ，それから占領により再度「分離」されたものである。（アメリカ人は狂信的に――そして，無知のままに――国家所有のあらゆる形態に反対している。）我々は平炉を訪ねたが，炉が開かれたときは，いつものように私はたいへんスリルを感じた。その後，我々は圧延工場，鋼板工場，それから溶鉱炉を廻った。この時までに私はたいへん疲れを感じ，短かすぎた睡眠の影響を感じはじめていた。会社クラブに戻り，全く十分な昼食をとる。たいへんおもしろく，非常にピリッとした日本料理が6コース程でて，我々は多量の酒を飲んだ。とうとう満腹になって，自在ドアが再び開いて魅惑的なウエイトレスが皆はなやかな着物を着て大皿を持ってぶらぶら廻っているとき，我々はくつろいで背にもたれていたが，その大皿の上には2インチ程の厚さの大きなグリル・ステーキがのっており，その周りには山程の「フレンチ・フライ」ポテトがあった！　私にはガードナー元帥が私と同様にびっくり仰天して自分の皿をみているのがみえたが，我々はそれを食べる努力をしなければならず，それを楽しんでいる風にみせねばならなかった。これは西欧の慣行についてしばしばなされる誤解の好例である。彼等は自分自身のおいしい食事は西欧人には不適当であり，我々はアメリカ風のスタイルのステーキとチップスがなければ満足することができない，と考えているようである。これに関する最悪のことは，我々が彼等はなおまだすべての食糧が絶望的に不足しており，勿論すべての食事と同様に，今日のこの特別の食事が本当に馬鹿気た浪費であることを知っているということである。すべての日本人がステーキとチップスを意地

きたなくがつがつと食べ，あたかも彼等は他の何も食べてこなかったかのように，何ヶ月も何年もの半飢餓状態の長期間にわたる滞貨を埋め合わせようとしたのに，私は気づいた。その後，婦人たちが日本舞踊をおどり，一人の男の人が三味線――一種のギター――を引き，我々を楽しませた。この後，炭鉱夫の指導者たちとさらに話をした。再び我々は賃金と生活費の矛盾する数値を解きほぐそうとするときのいつもの困難を感じた。通訳を通して何らかの理解可能な説明を得るのは，全く不可能のようである。明瞭なのは，全体系が極度に温情主義的であるということである。西欧には対応するものがない，あらゆる種類の特別な支払いと習慣的な慣習がある。もし私が考慮されるべきすべての真の像を得たならば，西欧の賃金との大きな相違は多少縮小するだろうと思う。私は組合の指導者たちの質によい印象をもち，早晩，正常に発展していくと信じている。列車に戻り，短時間休憩し，その後スミス元帥と夕食をとる。

11月1日

芦屋飛行場より飛行機で東京に向け，午前8時40分に発つ。列車の狭苦しい場所で2晩過した後なので，少々疲れている。9千フィートの高さを飛ぶ，美しい朝。輝くような朝の紺色の空に垂直に突き出している富士山に，パイロットは親切にも極めて接近して飛ぶというすてきな飛行。通りすぎて振り向くと，北側斜面にもっと雪があるのがみえた。富士はその背後にある高い山々の連続した峰に対して突き出ており，その中腹の周りを雲の帯が巻いていた。これは絶景だった。午前11時30分，羽田空港着。追い風のため予定より30分早い到着となった。大使館にいき，静かな昼食。午後ガスコイン夫人が，神田の本屋と版画店への私の案内役をしようと，親切にも申しでてくれた。私は3つの紙ばさみに納まっている何枚かのたいへん良い版画を買った。我々はそれから丸の内の店に掛け物（日本の家屋でたいへん効果的に展示される壁の巻き物）を見にいった。いくつかたいへん良い物は高価ではなかったけれど，買わないことに決めた。というのは，それらを効果的に展示するのに充分な奥行きの壁が，私の家にはないからである。その店は品物がぎゅうぎゅうづめにしてあった。――非常に精巧な典型的な日本の美術品や工芸品に密接して，あらゆる種類の西欧の安ぴか物が大量にある。（多数の日本の安ぴか物もある！）日本人が西欧の美術品や工芸品を扱うときに示す驚く程の鑑賞力の欠如に，私は再びたまらなくなった。私が買いたい思いに駆られたどの商品――掛け物の何枚かを除いて――の価格も，すべて不合理な為替相場のために極めて高かった。（1ポンドが40円とは，全く馬鹿気ている。正しい相場は，1ポンドに付き約750円であるべきだときいた！闇市場が不均衡をなおすのだと私は感づいたが，明らかに，それは私には役に立たない。）大使館に戻ったが，そこでローズが私の買った版画を羨ましがったので，私はびっくりした。最後には私はその紙ばさみの一つを，かなりいやいやながらであったが，彼にあげざるをえなかった。その後，私は熱い風呂を充分楽しみ，十分かつ静かな夕

食をとり，それから早く寝た。

11月2日

また美しい朝。遅く起き，午前中物を書き，静かに過ごす。完全に休息し，回復したと感じる。私は自分の身体に対する要求に身体が対応している点に驚きかつよろこんでいる。私の回復力はきわめて良く，私が長い日程のつまった，余りにも少ない睡眠しかとれない毎日の結果どんなに疲れても，一晩よく眠れば回復するのである。これは，私の年齢からすれば，勿論感謝すべきことである。私は早い昼食をとり，明治神宮と帝国美術館にでかけた。神宮はけばけばしいもので，天皇の生涯の重大な各瞬間を描写したパノラマ的な壁の装飾があり，それはむしろ昔のジオラマのやり方にならったものだった。午後一杯，美術館で過す。日本美術の宝物の見事なコレクション。絵画記念館も見る。私は有名な伝統的な茶会の実演にたいへん興味をもった。夜は，カードナー元帥とその夫人が招待者となる大使館での大規模な正式晩餐会の客の一人となった。

11月3日

天皇誕生日祝典と新憲法承認を見に再び明治神宮を訪れる。多くの群衆がいた。――合衆国の有力者の大部分が奥さん同伴でいたし，実際，完全に外国人の社会がそこにあった。最初の余興は，相撲の力士であり，彼等は巨大な人間で，肥大し，膨張しているが，たいへん大きな筋肉をもっていた。彼等は大量の牛乳を飲んでその巨大な大きさと重量にまでなったが，幼児でさえ全く少量しか牛乳が飲まれていない国で，このようなことを面目をたててやることには，若干の困難があるときいた。この力士たちはその日は実演しなかったが，次の試合に成功するよう神社に伝統的な祈禱を行なった。（彼等の神々はどちらの祈禱者を勝たせたらよいか，迷ったに違いない！）力士たちは腰から前にぶら下がっている小さな刺しゅうをした前垂れを除けば，全裸である。彼らは神社の前にしばらくの間，微動だにせず立っていた。それからまず一方の大きな脚をゆっくりとあげ，ついで他の脚をそれが身体の前にまっすぐに，しゃちこばって保つまであげた。この姿勢は多分1分間，全重量が一方の裸足で均衡を保ちつつ続く。このようにしながら均衡を保持するのは極めて困難なことにちがいない。これが彼等が保持しようとしたすべてであって，礼儀作法を保持しようとする試みなどなかった！　彼らの生殖器は他の器官と同様に異常に発達し，小さな前垂れがずれたのではっきりとみえるようになった。後にローズがいったように，彼等は「雄牛のような睾丸をもっていた。」その後，我々は深紅色と金色の美しい伝統的な衣裳をきた雅楽の舞子をみた。彼女たちには一団の楽士の伴奏がついたが，楽士は同じようにたいへん豪華な伝統的な官服で色彩豊かに盛装していた。彼等は奇妙な形をした珍しい楽器を演奏しており，シンバルと太鼓を除く殆んどすべての楽器が，かん高い物悲しい音色をだしていた。舞子も楽士も神主であると教えられた。後に日本のポロの球戯を観戦したが，毛むくじゃらの小馬にのった官吏によってなされた。西欧で行なわれるポロ・

ゲームをむしろ変形して退屈にしたものだったのが印象的だった。ポロ・ゲームはインディアンに起源をもっていると私は思う。大観衆が周囲をぐるぐる廻るその場所は，バンク・ホリデイの日の〔ロンドンの〕ハムステッド・ヒースに極めてよく似ていた。我々はピクニック弁当をもってきたが，それを草の上に坐りながら食べた。多くの日本人がするように，輝く光と暑い陽光の下では巨木の陰に入って。真に記憶に残る一日だ。それから大使館に戻り，お茶を飲み，夕方早く連合国軍最高司令部でのマッカーサー元帥との会見の準備をする。

マッカーサー元帥との会見

これは1時間45分続いた。我々は元帥の周知の暖かい態度で，たいへん誠意をもって迎えられた。彼は前回私が会ったときほど疲れているようにはみえなかった。彼はイタリア的容貌をしており，彼のなかにはレッド・インディアンの血が少し流れているときいていた。彼は雄々しい美男子で，噂によると身体の健康を維持するために非常に骨を折っているそうだが，確かに成功している。彼は競技選手のような身体をしており，彼の年齢の半分の男の人の活力をもっている。私は労働組合に対する助言者が重要な組合のそれぞれの本部のスタッフに加わるべきであると提案して，討論を始めた。(労働組合の指導者たちはたいへん未熟で無経験なので，西欧の特定の職業ないし産業の経験ある労働組合主義者は大きな助けになりうると私には思われた。)マッカーサーは「100%その目的に」同意したが，「しかし……。」殆どすべての質問に対する彼の解答の方法は，非常に過度に使われるきまり文句の長い暗誦であり，通常，その課題に関する西暦1年からの歴史の概要であった！　彼はまた人をやりこめるという腹立たしい癖をもっていたが，彼はひどく反発すると我々は強く注意されていたので，じっとこらえなければならない。彼の方法はこのように大声で話す方法のようであり，その間，部分的にしか自分の話に熱中していない彼の心は，提起された質問に対する彼の最終的解答を出すのに追われていた。その習慣はイライラさせるし，ひどく時間を浪費させる。彼は合衆国から充分な数の労働組合の助言者を得ようと試みたが，それは失敗したといった。私は彼が領域を拡げ，イギリスのT.U.C.〔労働組合会議〕に援助を請うよう示唆した。明らかに彼はその考えを好まず，「被雇用者，雇用者，公共の三角形」についての下らぬ長話をはじめ，それは「強制企業と自由企業」へと続き，呪文のごとく繰り返された。すべてせんじ詰めれば，彼は労働組合に不信をもっており，社会主義者が嫌いだということである。彼は勿論多くの言葉でそうはいわないが，それは一目瞭然である。彼は社会問題を真に理解しているのではなく，諸利害の調停は善意の実施によって可能であると考えている。ティーリングは，日本のローマ・カソリック教会の問題を提起した。マッカーサーは完全な寛容さを示し，彼は法王からそのために資金を得ようと試みたが，法王は金がないという返事をよこしたといった！　ティーリングはそこで，日本のローマ・カソリックの

仕事に対して合衆国政府が直接補助金をだすことを提案した。ティーリングの主張によれば，ローマ・カソリックの仕事は安定化のための大きな影響力をもつことになるのである。これによりマッカーサーは教会の基盤の拡大について長い話をはじめた。――しかし，結局は資金がなかった。ローズとプレスコットは，綿工業で彼等が観察した諸条件についてマッカーサーに迫ったが，満足すべき解答は得られなかった。――マッカーサーは，事態が改善されるのをみまもりたいということをあいまいにかつ冗長に述べたにすぎなかった。ローズはそれから，もし常に日本の生活水準が上昇しつづけるためには避妊が重要であるということにマッカーサーは同意するかどうか尋ねた。マッカーサーは非常に激昂し，この考えを斥けた。（彼は合衆国の余り洗練されていない教会の宗派の一つに属している。）だが，彼は急増する日本の人口が提起する諸問題に対して，いかなる種類の解決法ももっていなかった。彼は，日本人は「民主主義と一緒にキリスト教も受け入れてきた」と，語気を強めていった。彼の支配がすでに日本でもたらした基礎的諸変化に関する彼の自己満足的見解を，私にとっては極めて無知な見解を，きくのはおそろしいことである。彼は日本人との関係を確立しておらず，すべて彼の情報と見解は彼の周囲の個人的友人の限られた集団に頼っており，その友人達はすべてアメリカ人で，マッカーサーのいうことはわずかなことでも一心に聞くという印象を与える人たちである，というのが真実であると私は思う。この構成は全く不健全なものという印象を私に与えた。私は彼が当地では根を張っていないという感をいっそう強くした。戦略について彼は合衆国の計画の興味深い説明を行なった。主要な考えは，列島に基地をおく海空軍事力を合衆国統制下で支配するということであり，主要基地は沖縄である。彼は日本自体を使用する必要もなければ，またそうする重要な政治的理由もないといった。中立を続けるにちがいない日本との政治同盟という考えを，彼はきっぱりと拒絶した。合衆国は，日本が中立であるし，今後もそうありつづけることがわかるだろう。全く疑いないことだが，マッカーサーは大きな個人的力をもった有能な人である。しかし，彼は完全にそのことを知っており，指導的役割において彼が重要であることを確信している。しかし，本当は，彼は殆ど知らないことを，我慢できない程長々ともったいぶって話す強引な鼻もちならない奴でもある。最後に私は，我々を彼の部下の人々が歓迎してくれた親切に対し賞賛の言葉（当然報いを受けに足る）を呈したが，これは彼を非常によろこばせたようだった。彼は翌年再び我々を招待するといったが，私は我々にその機会があるのを望むだけである。その後午後9時に独身将校クラブにいき，素敵な夕食と楽しい話をする。

11月4日

午前中，東京の主要な放送局である放送会館で最後の記者会見。連合国や日本の新聞関係の男女が多数参加し，私自身が主宰役となる。手ごわいことは何も生じなかった。彼等は我々がマッカーサーと話したことを非常に

ききたがったが，完全な機密なので除外せざるをえなかった。これがかなり会見の興をさました。日本の新聞記者たちは，我々が日本の国や人々や制度について何と考えているかについて，日常的なことを知りたがった！興味をそそることは何も生ぜず，約1時間後，終了を告げられ，会見を終えた。入口にガスコイン閣下がチェイズ元帥と私を待っているのがみえて，たいへん驚いた。我々は閣下のロールス・ロイスに乗りこみ，おそろしい途方もないサイレンをならす1台のジープにのった合衆国軍警察のグループと武装兵の満載した装甲車に先導されて，フォート・ドレイクに向った。両側にはオートバイに乗った武装兵の長い列があり，一方，背後には，ティーリングとローズとプレスコットが大型アメリカ車に乗っており，一番後には兵士を満載したもう1台の大きな装甲車があった。後で私は，私と同様にティーリングとローズとプレスコットも，このような手筈になっていることに気づきもしなかった，ということを発見した。フォート・ドレイクに着くと，我々は儀仗兵と楽隊に迎えられた。代表団長として儀仗兵を閲兵するのは私の任務だった。全くゴリラのような巨漢たちからなっていたようだったが，私は対照的に小さくみえた。幸い，私に同行したチェイズ元帥は私の背丈とほぼ同じでありやや外側に曲った騎兵の脚をしていたので，彼はもっと背が低くみえる。私が彼を横眼でみてから，私自身の当惑は，隠すのが困難なほどの人目につかない笑いにかわっていた。眺めていた他のすべての人々にはおかしな光景だったにちがいない。その後で，私は頭から帽子を離したままの姿勢で一人で敬礼台に立たねばならず，軍隊の編隊をなす50台の大きなタンクの1台から敬礼を受けた。これはすべてチェイズ元帥の側の善意から出たことであり，私は突然に降りかかってきたこのようなことほど当惑したことはかつて殆どなかったけれども，それが提案されたときの精神からして，私はそれを受け入れざるをえなかった。多少とも予告があったらよかったのだが，閣下も後に私に確言したところによると，閣下も元帥がどんな手筈をとっていたのか何も知らなかった。その後，我々は将校用食堂でたいへん楽しい昼食をとる。私はアメリカ人の飲酒の習慣を知って多少驚いたのだが，昼食の前には一杯の少量のカクテルしか差しだされず，食事の間は全くアルコールなしということがわかった。私は将校の一人にわざとこれは通常のやり方かと尋ねたが，彼はフォート・ドレイクではそれは変更できないと答えた。チェイズはこの問題についてはマッカーサの見解の一部と一致していたので，その食堂では極く少量の飲酒しか許されていなかった。ではあるが，私はチェイズが大使館の職務のときには誰にもひけをとらず飲むのを見たことがある。それはたいへん愉快なエピソードであった。その後我々は大使館に戻り，お茶を飲む。午後の残りは，銀座で買物をした。――買う価値のある物すべてが我々のポンドの購買力を越えるので，せいぜいウィンドウ・ショッピングである。その後，さらにお茶を飲み，王室弁護士コミンズ・カールとリード・コリンズ陸軍中佐と話をする。後者はたいへん興味深い人

で，私に日本人は再び明らかに「高慢」になりつつあり，アメリカ人を外にだすために，今や「立入禁止」の標識を頻ぱんに使いつつあると語った。ドウ・ヴェール・レッドマン夫妻と夕食。招待客のなかには，『タイムズ』のフランク・ホウリィ，『ニューズ・クロニクル』と『シドニー・サン』のジャック・パーシヴァルがいた。つまらぬ話。天皇の人気についてのパーシヴァルの話以外は，何も新しいことはない。彼は大阪では7万5千人が天皇の周りに群がり，彼等の忠誠を叫び，米軍護衛兵は天皇が圧死するのを避けるためピストルで空砲を打たねばならなかったといった。二人の新聞記者とも，日本の民主主義は「全てたわごと」であると信じている。彼等は合衆国の計画のすべての側面と民主主義の勝手に申し立てられた受容にたいしひどく冷笑的であり，このような見解はアメリカ人を含むすべての新聞記者の75%が支持していると主張した。また，米兵の模擬投票は，マッカーサーが彼自身の軍隊に非常に不人気であることを暴露したともいった。レッドマンは強く正反対の見解を主張したが，ガスコインは後で私に，新聞記者は正しいと断言した。

11月5日

午前7時30分，有名な日光神社へ車で出発。案内役兼通訳のフィリス・ホーンビィという大使館職員の素敵な女性とハーヴェイ・ローズと一緒である。ひどい道の3時間半の行程だったが，最近洪水の被害に見舞われた地域を通ったとき，いくつかの危険にみえるグラグラした仮設の橋をはやくも渡ることになった。殆ど絶えず復興中の地帯を，道路が殆ど完全に通っていた。これらの島〔日本〕の人口密度は全く異常なものである。ある地点で車から振りかえると，いつものように雲海に浮かんでいる富士山の美景がもう一度みえたが，雪で覆われている山頂は，早朝の真珠のような陽の光にくっきりと浮かびあがっていた。我々は日光に午前11時に着いた。車は紅葉という色彩の大景観をもつ美しい田園を通っていった。山に上るにつれて，景色は本当に美しくなった。最後の25マイル程は大きな杉の木——日本の針葉樹のひとつ——の壮大な街道を通った。この木はもともとは神社へ向う途中の巡礼が一種の信心深い奉献として植えた種から成長したものだときいた。日光そのものは，ふつうの日本の小都市であるが，山の中にじつに美しく位置している。我々が昼食をとったホテルには，大きな長方形の窓のある食堂があって，窓からは川にまたがる聖なる橋の上方の美しい眺めがみえ，川は荒々しく渓谷に流れこんでおり，背景には巨大な山々がある。低い斜面の鮮やかな色は全く並はずれており，燃えるような楓(かえで)の大きな斑点がある。寺院と神社は骨の折れる行程をきた甲斐があるものだったが，充分満足させない日本のおきまりのものがあった。至るところに誇張しようとする意図が示されていた。一つが良いなら，二つはより良いに違いない，というような。ここには有名な「三猿」——聞かざる，言わざる，見ざる——の元祖がある。木彫の原型は建物の一つの正面の装飾帯となっている。一つの珍しいからくり——鳴き龍があった。うるしと金で見事に装飾され

た大広間に，大きな龍が天井の一部を覆っている。幸運に恵まれた１人の聴衆が龍の下の床のある一定の点に立ち，彼が両手を大きくたたくと，かすかな鳴き声が龍からきこえてくるように感じられる。熱烈な信者にはそれはたいへん効果的だと私は想像する。寺院に数時間いたのち，我々は何軒かの店を探索した。大きな古物と美術と骨董品の店があり，そこでは展示品のすべてが，その種のものとしてはすばらしくかつ充分注意して選択してあった。展示されている商品の簡単なものでさえ，我々の購買力を越えているのは気違い沙汰である。私はおもちゃ屋に入り，〔孫の〕キースのために一二小さなものを買って満足せねばならなかった。長い帰路で我々が停ったとき，ローズはある農家を訪れることができたが，そこで彼は（奥さんのために）家にもちかえる本物の日本米を一握り手にいれることができた！　今日は本当に記憶に残る一日であり，我々の日本訪問のクライマックスだった。ローズと私はその記憶を長く大切にするだろう。

（経済学部教授）